ESD と開発教育

「岐阜県岐阜市立境川中学校　教諭　野村佳世　先生」にお聞きしました！

※野村先生の実践の一例は別添をご参照ください。

先生は、いわゆる「ESD」といわゆる「開発教育」のどちらを先に取り組み始めたのですか？

2005 年、「開発教育」から先に取り組み始めました。・・・とは言っても、当初行っていたことは、「国際交流」でした。日本に住んでいる外国人の方を招いて、国の話をしてもらいました。国の音楽を聴いたり、ダンスを踊ったり、ゲームをしたり、料理を作って食べたり、言語を教えてもらったり・・・生徒が体験しながら他国の文化を肯定的に受け入れ、理解することを目指して、取り組んでいました。その後、2010 年にもっと生徒が主体的に学ぶためにはどうしたらよいのか考え、「ＥＳＤ」に出会い、教材づくりを行うようになりました。

ＥＳＤに取り組み始めたきっかけを教えてください。

社会科を担当していることもあり、「持続可能な社会」という用語が、地理・公民の教科書によく出てきます。様々な単元を学んだ後、学習のまとめとして、生徒に投げかけられている問いは、「持続可能な社会」のために私たちには何ができるか、ということです。そこで、ＥＳＤを総合的に学び、「持続可能な社会」を達成するためにできることを教えるのではなく、生徒主体で考え、生徒の行動変容を促す必要があると思ったので、取り組み始めました。

次に、開発教育に取り組み始めたきっかけお教えてください。

ワークショップで、途上国について考えるイベントに参加したことがきっかけです。初めてワークショップに参加した私にとって、知らない方と対話しながら、楽しく学べた時間が新鮮で、自分でもやってみたいと思いました。それから、開発教育について、調べたり、自分で教材を開発したりできる楽しさを知りました。ワークショップの仕方、考えの引き出し方にも色々あり、自分の教科で生かしてみようと、試みたことがきっかけで、気付けば１０年以上もこの教育に携わることになりました。

ＥＳＤと開発教育を明確に区別しながら活動しているのですか？

ＥＳＤでは、常に自分にできることを「考える」ようにしています。「ＭＹ箸を持ちます」―本当に？何度も聞き返します。言葉で言うだけで終わらせず、生徒自身が本当に変わり、行動できることを１つでもいい、絶対にできることを提案し、行動できるようファシリテートしています。
開発教育では、世界の様子を様々な視点から「知る」ことを目標に授業づくりを行っています。

先生のご経験から、ＥＳＤと開発教育の親和性、共通点、明確な相違点などあれば、お聞かせください。

共通点はどちらも多面的な見方、コミュニケーション能力を身に付けることができる点だと思います。そして、学級の仲間と持続可能な社会の実現を視野に入れて、対話をすることで、相手の存在を愛おしく感じたり、相手を大切にする人権感覚が養うことだと思います。ESD や開発教育は、これからの社会で必要な計画力、実行力、柔軟性などの能力を身に付け、世界の事情も知ることができる、魅力的な教育だと思います。

今後取り組みたいことは何ですか。

今後は、世界が抱える課題について、生徒が十分に学んだ後、地域の大人や他学年の生徒に対して、ワークショップを用いて、成果や解決案を発表できる場を設けたいと思います。
私自身は、今後も「ＥＳＤ・開発教育」と言えば、野村先生！と言われるように学校での掲示物作成、教員研修、公開授業はもちろんのこと、同じ志をもつ仲間を大切にネットワーク・共有の場所作りを行っていきたいと思います。